

スティーヴンズの茶の心

田 中 泰 賢

ウォレス・スティーヴンズ (Wallace Stevens) は手紙の中で次の様に述べている。

When I was young and reading right and left, Max Müller was the conspicuous Orientalist of the day,¹⁾ . . .

スティーヴンズも注目したマックス・ミュラー (1823-1900) はドイツに生まれ、イギリスで活動したインド学者、言語学者、宗教学者であった。1950年よりオックスフォード大学の教授を務めた。《リグ・ベータ》の校訂、サンスクリット本《大無量寿経》の校訂 (南条文雄と共同校訂, 1883) などインド学の諸分野で幅広く活躍するとともに、《言語学講義》(1861) で知られる比較言語学の権威であり、また《比較宗教学序説》(1874) で知られる比較宗教学の創始者の一人でもあった。また、イスラムやイラン、インド、中国の諸宗教の主要な文献を英訳で刊行した《東方聖書》51巻 (1879-1904) を編集したことも重要な業績である²⁾。

ジョウン・リチャードソン (Joan Richardson) が、"And there was the scholarly interest in F. Max Müller's translations of Sanskrit texts and editions of Japanese Buddhist works."³⁾ と述べている様に、スティーヴンズはミュラーの作品を通してインド思想、仏教に親しむことが出来た。ミュラーは次の様に語っている。「釋迦が弟子に、必ず行へよと命じた奇蹟がある。夫は如何なるものぞと尋ねるに、曰く汝の善行を隠せよ、而して汝の行ひたる罪を、世界の前に告白せよと。是れが佛の所謂眞の奇蹟なのだ。」⁴⁾ スティーヴンズはミュラーの書物を読み、仏教から智慧を学んでいった。

スティーヴンズは次の様な手紙を書いている。

You wonder what I have been doing to-night. Well, I continued my superficial study of Mr. [Kakuzo] Okakura's book, and read a great deal besides.⁵⁾

この手紙から彼は岡倉天心の著書をかなり読んでいた様子がうかがえる。例えば『東洋の理想』を読んでいる⁶⁾。そればかりでなく、リチャードソンによると、『茶の本』も読んでいた⁷⁾。その岡倉の『茶の本』の中に、チャールズ・ラム (Charles Lamb, 1775-1834)⁸⁾ の言葉が引用されている。「この道の公然たる帰依者であるチャールズ・ラムの「自分が知っている無上の喜びは、ひそかに善行をおこない、偶然にそれが顕れることだ」という言葉には、茶道の真髓が鳴っていた。」⁹⁾ スティーヴンズは岡倉の『茶の本』からラムの言葉を知り、このラムの言葉が気に入り、モットーにした。

さきほどあげた、ミュラーの引用した釈迦の言葉「汝の善行を隠せよ、……」と岡倉の『茶の本』に引用されていたラムの言葉「ひそかに善行をおこない、……」とが非常に似ているのは興味深い。スティーヴンズは、ミュラーや岡倉の書物から東洋、特に仏教的思想に親しんだものと思われる。潜在的にスティーヴンズの胸にあった釈迦の言葉と似た言葉が、有名なイギリス人、ラムに見出されることによって、その言葉はいつきよに彼にとって親しいものになったに違いない。

スティーヴンズがモットーにした「自分が知っている無上の喜びは、ひそかに善行をおこない、偶然にそれが顕れることだ。」という言葉は、岡倉に言わせれば、茶道の核心をついていた。岡倉は「茶道とは、美を発見するために美を隠し、顕わすことをはばかるものを暗示する術だからである。」¹⁰⁾ と言い切っている。茶道とは美を発見するために美を隠すのであるが、ラムの言葉「ひそかに善行をおこない、……」は茶道のあり方を端的に示していた。それは又、釈迦の言葉「汝の善行をかくせよ、……」に帰着する。つまり茶道の心は釈迦の心を顕わす術といえよう。

さてスティーヴンズの作品「日曜日の朝」(“SUNDAY MORNING”
の第1連はお茶を飲む場面から始まっている。

SUNDAY MORNING

I

Complacencies of the peignoir, and late
Coffee and oranges in a sunny chair,
And the green freedom of a cockatoo
Upon a rug mingle to dissipate
The holy hush of ancient sacrifice.
She dreams a little, and she feels the dark
Encroachment of that old catastrophe,
As a calm darkens among water-lights.
The pungent oranges and bright, green wings
Seem things in some procession of the dead,
Winding across wide water, without sound.
The day is like wide water, without sound,
Stilled for the passing of her dreaming feet
Over the seas, to silent Palestine,
Dominion of the blood and sepulchre.¹¹⁾

部屋着の満ち足りた気分,
日なたのイスで味わう
遅いお茶とオレンジ,
じゅうたんの上のオウムの緑色の自由が混じり合うと
古代のはりつけの聖なる静けさは消え去る。
彼女はちょっと夢を見る, そして
静けさが自己点火燈の中でほんやりしてくると,
あの古代の破局の暗い侵入を感じる。

すっぱいオレンジとあざやかな緑の翼は
音もなく広い水面をうねり渡る、
死者の行列の中のなにかにみえる。
一日は広い水面に似て、音もなく、
静まり彼女の夢見る足は
海を越えて沈黙のパレスチナへ、
血と墓の領土へと過ぎ去る。 (拙訳)

「部屋着の満ち足りた気分／日なたのイスで味わう／遅いお茶とオレンジ」は無上の喜びのはずである。一杯のお茶に満足感を覚えるのを「茶気がある」という。岡倉は「茶道は、日常生活のむさくるしい諸事実の中にある美を崇拝することを根底とする儀式である。」¹²⁾と述べている。スティーヴンズは、この岡倉の語っている、なにげないところ、脚下に美を見い出す茶の心を読んでいた。だから、スティーヴンズは“Tea most beautiful thing in the world is, of course, the world itself.”¹³⁾と語るのである。

スティーヴンズが読んだ岡倉の『茶の本』を更に引用しよう。「僧たちは菩提達摩の像の前に集って、深遠な聖餐の形式で一箇の碗から茶を飲んだ。この禅の儀式が、ついに十五世紀日本の茶道に発展した。」¹⁴⁾茶道とは禅の心を司さどることである。茶道を行う人は禅の心、茶の心を司さどる人である。スティーヴンズは、それに対して、“The poet is the priest of the invisible.”¹⁵⁾と述べて、心を司さどる禅僧の如く、詩人も又心を司さどる僧侶であると考えている。

スティーヴンズは又“A poem is a café. (Restoration.)”¹⁶⁾と述べている。詩とはコーヒーである。詩とは茶であり、茶の心である。茶道はあらゆるものの中に、生命という美を見い出す心を養うものであるが、詩も又茶の心と同じである。お茶が心を癒してくれる様に、詩も又心を回復させる働きがある。スティーヴンズは「フーンの宮殿でお茶を」“Tea at the Palaz of Hoon”という詩を書いている。その後半部

分で次の様にうたっている。

Out of my mind the golden ointment rained,
And my ears made the blowing hymns they heard.
I was myself the compass of that sea:

I was the world in which I walked, and what I saw
Or heard or felt came not but from myself;
And there I found myself more truly and more strange.¹⁷⁾

私の心から黄金の膏薬が雨の様に降り、
私の両耳が彼等の聞く賛歌を鳴らした。
私自身があの海の羅針儀だった：

私が私の歩いていた世界であり、私が見たり
聞いたり感じたりしたものは私自身からにはほかならなかった；
そこにおいて一層真の、一層未知の自己を発見した。 (拙訳)

OEDによると、‘HOON’はインドのサンスクリット語、hūna から来ており、‘A gold coin, the pagoda’ という意味である。また ‘the pagoda’ は仏塔を連想させるし、インドはお茶のおいしい国である。この詩の最終行の「そこにおいて一層真の、一層未知の自己を発見した。」という言葉は禅でいえば「父母未生已前本来面目」に近い。父母未生已前本来面目とは自己の本来のすがた、即ち心性のことという。スティーヴンズの詩における禅の父母未生已前本来面目のあらわれについて有元清城氏が論じている¹⁸⁾。

渡辺久義氏も、“Indeed, for the Eastern reader at least, it is almost impossible to read some of his poems without thinking of Zen.”¹⁹⁾ と述べている様に、スティーヴンズの詩の中には禅的なものもいくつかある。その中の一つに、この「フーンの宮殿でお茶を」の詩も含まれる。

そして「小人」“THE DWARF”も又禅的な詩と思われるのでここに引用してみる。

THE DWARF

Now it is September and the web is woven.

The web is woven and you have to wear it.

The winter is made and you have to bear it,

The winter web, the winter woven, wind and wind,

For all the thoughts of summer that go with it

In the mind, pupa of straw, moppet of rags.

It is the mind that is woven, the mind that was jerked

And tufted in straggling thunder and shattered sun.

It is all that you are, the final dwarf of you,

That is woven and woven and waiting to be worn,

Neither as mask nor as garment but as a being,

Torn from insipid summer, for the mirror of cold,

Sitting beside your lamp, there citron to nibble

And coffee dribble... Frost is in the stubble.

小 人

今9月、織物が織られる。

織物が織られ、君はそれを着なければならぬ。

冬が作られ、君はそれに耐えなければならぬ。

冬の織物、織られた冬、風と風、

冬の織物に伴う夏の思いは
心、わらのさなぎ、ぼろ服の子供にあるが。

織られるのは心、うろつく雷と粉々になる太陽の中で
強く動かし、ふさで飾られた心。

君が存在しているのが全て、究極の小人の君が
織られそして織られ、身に着けられるのを待っている、

仮面としてでなく、衣服としてでなく、一つの存在として、
生氣のない夏から引き裂かれ、寒さの鎖として、

君のランプのそばに坐り、シトロンを少しずつかじり、
コーヒーを少しずつ飲む……霜は刈り株に降りている。(拙訳)

小人から、東洋人、或いは茶道の国に住む日本人が連想される。「冬が作られ、君はそれに耐えなければならない」という表現は、彼の有名な作品「雪だるま」(“THE SNOW MAN”)の最初の部分「人は冬の心を持たなければならない／雪が固まりついた松の枝や霜をながめるために；」(“One must have a mind of winter/To regard the frost and the boughs/Of the pine-trees crusted with snows;”²¹⁾)を思い出させる。「君が存在しているのが全て、究極の小人の君が／織られそして織られ、身に着けられるのを待っている」と力強くうたわれている。一つの存在の中に、あらゆる存在の中に、生命としての美が存在するのである。大小、長短、という思いの我を離れて清浄無垢の心になる時、あらゆるものの中に尊さ、躍動する力が見られるのである。

シトロンをかじり、コーヒーを味わう、その人は、一人のかけがえのない存在である。そこには、名誉とか、地位とか、といった虚飾がぬぎ捨てられ、生氣をとりもどした暖かみのある人間がお茶を飲んでいる。‘nibble’, ‘dribble’, ‘stubble’ といった言葉遊びをしながら、生命の美という織物を詩の中で織っていこうとしている。お茶を飲む心

は霜のように清浄である。スティーヴンズに「お茶」(“TEA”) という詩がある。

TEA

When the elephant's-ear in the park
Shrivelled in frost,
And the leaves on the paths
Ran like rats,
Your lamp-light fell
On shining pillows,
Of sea-shades and sky-shades,
Like umbrellas in Java.²²⁾

お茶

公園の象の耳が
霜でしぼんだ時、
径路の葉がネズミの様に走った時、
君の灯火の明りが
ジャワの傘の様な
海の傘と空の傘の
輝く枕の上に落ちた。

(拙訳)

「公園の象の耳が霜でしぼんだ時」を読むとなにかほほえましい、ユーモラスなものを覚える。象という大きな動物と、ネズミという小さな動物が対比され、象の大きさがイメージとしてふくらむが、「霜でしぼんだ」(“Shrivelled in frost”) という表現で、ネズミみたいに小さくなってしまったというイメージに転換されていくところにもおかしさがあるのかも知れない。新倉俊一氏は「意味と無意味の衝突が

彼のスタイルの本質なのだ。」²³⁾と述べ、有元清城氏は「かいぎやくとユーモアと遊びから本質の問題に迫ろうとするのが詩人 Stevens の常套手段である。」²⁴⁾と述べている。

禅も、そして禅的な心を基にしている茶道も俳句も、川柳も、生きとし生けるもの全てへのいとおしみから来ているはずである。それは、存在するものの不完全さ、誤ち、失敗を許すことの出来る心を開いていくことである。「芭蕉と言う男は枕元へ馬が屎するのをさへ雅な事と見立てて発句した。」²⁵⁾その時、機智、ユーモアが自ずと生じてくる。有元氏が「時間の流動を一瞬の中に凝結させるという点で Stevens の詩は日本の俳句と共通点を持っている。」²⁶⁾と述べる様に、スティーヴンズも、俳句の持つ機智のようなものを持っていたことがわかる。「しかしこれと平行して Stevens の世界には彼独特の様々な style があった——ユーモア、ウィット、pun、風変りな固有名詞への好み、音に対する鋭敏な感覚、詩形に対する強い関心、一種の高踏的で aloof な態度。これらはすべて詩人としての彼の本質的な生地であって、これを取り去ることは言うまでもなく彼を殺すことになる。」²⁷⁾

さきほどの詩「お茶」の3行目「径路」‘paths’という言葉がある。茶道について岡倉はこう説明する。「^{グオ}「道」は文字どおり「径路」を意味する。それは「進路」(the Way), 「絶対」(the Absolute), 「法則」(the Law), 「自然」(Nature), 「最高の理性」(Supreme Reason), 「方式」(the Mode) などと幾通りにも訳されてきた。中略。それは独りで立ち、不変である。自転するがみずからに危険を招くことがなく、宇宙の母である。私はその名を知らない。そこでそれを『径路』と呼ぶ。不本意ながら私はそれを『無^{インフィニティ}限』と呼ぶ。『無^{インフィニティ}限』は『迅^{フリーティング}束』であり、『迅^{フリーティング}束』は『消^{ヴァニッシング}滅』であり、『消^{ヴァニッシング}滅』は『回^{リヴァーティング}帰』である。」²⁸⁾

この「お茶」という詩には、お茶のことは出てこないけれど、お茶の心がうたわれている。「公園の象の耳が／霜でしぼんだ時、／径路の葉がネズミの様に走った時、」は世界の現象、事象をあらわしている。

「君の灯火の明りが」は心、或いは求道心、仏心、茶の心である。「海と空」は無限をあらわすが、「傘」が示す様に保護してくれるものでもある。「輝く枕」とは、道であり、最高の理性であり、法則である。この現象界、自己の生きている俗界において、様々な因と縁によって、求道心がめばえ、仏道、或いは茶道を歩むのである。

岡倉は「禅が特に東洋思想になした貢献は、俗界を精神界と同じ重要さをもつものと認めたことである。」²⁹⁾と述べている。スティーヴンズは、“The highest pursuit is the pursuit of happiness on earth.”³⁰⁾と述べて、この大地、自己の足場を離れて道を歩むことは出来ないことを教えている。従って、道を歩む場所は、自分の足下であり、自己の住む俗界であり、そして自己に最も近い心にある。その俗界のちりの中に住む男をうたった詩がある。

THE MAN ON THE DUMP

Day creeps down. The moon is creeping up.
The sun is a corbeil of flowers the moon Blanche
Places there, a bouquet. Ho-ho. . . The dump is full
Of images. Days pass like papers from a press.
The bouquets come here in the papers. So the sun,
And so the moon, both come, and the janitor's poems
Of every day, the wrapper on the can of pears,
The cat in the paper-bag, the corset, the box
From Esthonia: the tiger chest, for tea.³¹⁾

ごみの山の男

日はそっと沈む。月はい上っている。
太陽は白い月が空に置く花のかご、
花束だ。おーい……ごみの山には

イメージ
心象が**い**っぱいだ。

日は印刷機から出る新聞紙の様に過ぎていく。

花束は新聞紙に包まれてここへ来る。

太陽も、そして月もやって来る。

掃除夫の毎日の詩、梨かんの包み紙、

紙袋の中の猫、コルセット、エストニア

からの箱、即ちお茶のためのトラ模様の容器。

(拙訳)

なんと愉快な詩ではないか。お日様も月もまるで生き物の様に描かれている。2行目にはフランス語をあしらって花束の効果を出している。ごみの山は宝物でいっぱいである。お日様もやって来るし、月もやってくる。お茶を入れる箱もある。この箱はエストニアからのものである。このお茶の箱を使った人はどのような心を持っているのであろうか。茶道では一輪の花を添える。この目的は「草花の生命の美ぜんたいを呈示することだからである。」³²⁾ この詩の第2連は次の様うたう。

The freshness of night has been fresh a long time.

The freshness of morning, the blowing of day, one says

That it puffs as Cornelius Nepos reads, it puffs

More than, less than or it puffs like this or that.

The green smacks in the eye, the dew in the green

Smacks like fresh water in a can, like the sea

On a cocoanut—how many men have copied dew

For buttons, how many women have covered them-

selves

With dew, dew dresses, stones and chains of dew, heads

Of the floweriest flowers dewed with the dewiest dew.

One grows to hate these things except on the dump.³³⁾

新鮮な夜はずっと新鮮のままである。
新鮮な朝，夜明けの風，曰く
コルネリウス・ネポスの朗読のようにさっと吹く，
より強く，より弱く，あれやこれやのように吹く，と。
緑は目に沁み，緑の中の露は
かんに入った新鮮な水の様な味がする，
ココナッツについた海水のような味がする——
どれだけの男達がボタンのために露を写し，
どれだけの女達が露で，露のドレスで，
露の宝石や鎖で，最も露らしい露で
露にぬれた最も花らしい冠で身体を被ってきたのか。
ごみの山でなければ，これらのものは憎くなってくる。(拙訳)

‘The freshness’, ‘fresh’, ‘The green’, ‘the dew’, といった新鮮なイメージを与える言葉が多く使われて，すがすがしいものを覚える。特に興味深いのは終わりの部分，‘With dew, dew dresses, stones and chains of dew, heads/Of the floweriest flowers dewed with the dewiest dew.’である。‘dew’がなんどもくり返され，更に最上級と思われる‘the dewiest’や‘the floweriest’といった表現でユーモアな感じを与えている。夜も朝も，つまり，一日中，いつもさわやかなのだ。なのに，私達はごみの山のさわやかさに気づこうとしない。ごみの山とは，この私達の済んでいる俗界そのものの象徴かも知れない。とすれば，今，この住んでいるところは，実はいつもさわやかで，新鮮で，露の様にみずみずしいはずである。

このごみの山には，男達が，名誉や権力や地位を誇示するために使用した物，女達が着飾るために求めた物が，露におおわれて散在している。そしてさきほど述べた様に，ごみの山を象徴とみれば，この俗界において，男は名誉，地位，権力等にとりつかれてあくせくしているし，女も身を飾るために，せいっぱいの虚勢をはっている。それは

まことに露の如く、はかなくむなしいものであると皮肉な風にも理解出来る。そのように俗界は憎らしいものであるかも知れないが、その世界には露のようなすがすがしいものがあるのだ。私達は这个世界を離れて生きることが出来ない。だから这个世界にさわやかな風、美しい花のような心を見出すことが大切になってくる。

Now, in the time of spring (azaleas, trilliums,
Myrtle, viburnums, daffodils, blue phlox),
Between that disgust and this, between the things
That are on the dump (azaleas and so on)
And those that will be (azaleas and so on),
One feels the purifying change. One rejects
The trash.³⁴⁾

さて春の季節には (アザレア、延齢草、
銀梅花、ガマズミ、ラッパズイセン、ブルーフロックス)、
あれやこれやの嫌悪の間で、ごみの山に
あるもの (アザレア等々)
とごみの山にあるようになるもの (アザレア等々) の間で、
人は浄化していく変化を感じる。人は
ごみくずを拒絶する。 (拙訳)

春には、ごみの山に、或いは这个世界に色々な花が咲きみだれる。ごみの山、这个世界に於いて、嫌悪、敵対、闇討ち、策略、抜駆、等々、気のおけないことばかりであるが、しかし心現れる花が咲いていることにこの男は気づくのである。だが、世間の人々は、そのような花が咲いている这个世界をいたずらに拒絶したり、浄化してくれる花を見ようとしない。ごみの山、这个世界を厭ふのではなく、この男はそこに花のような美を感じとるのである。

That's the moment when the moon creeps up
To the bubbling of bassoons. That's the time
One looks at the elephant-colorings of tires.
Everything is shed; and the moon comes up as the moon
(All its images are in the dump) and you see
As a man (not like an image of a man),
You see the moon rise in the empty sky.³⁵⁾

それは月がバスーンの低音に合わせて
はい上る時。それは人が
古タイヤの象の色合いを見る時。
全てが照らされ、月は月として昇ってくるし
(月の心象一切はごみの山にある) 君は
(ある男の心象のようにではなく) 一人の男として見る、
君は月が虚空に昇るのを見る。 (拙訳)

月は楽器、バスーンの低く鳴る音色に合わせて昇っていく。象はトランペットの様に鳴くという。その様々に連想させる古タイヤの象の色合いを見る。月は全てをあまねく照らしていく。この言葉は道元禅師の「海の水を辞せざるは同事なり。」という言葉の思い出させる。この様に、月はわけへだてることなく一切を照らしていくのであるが、それに気づかない人もいる。岡倉の言葉を借りれば、「われわれが人生と呼ぶ、愚かしい労苦の狂瀾怒涛に浮かぶ自分自身の存在を、正しく律する秘訣を知らない人びとは、幸福と自足の外観をよそおうことにむなしく努めながらも、いつも悲惨な状態にいる。われわれは、精神の平静を保とうとしてはよろめき、水平線上に浮かぶどの雲にも、嵐の前兆をみる。しかし、永遠にむかってうねっていく大波の中に、喜びと美がある。なぜ、大波の霊に共鳴しないのか。あるいは列子のように、つむじ風に跨って行こうとしないのか。」³⁶⁾

One sits and beats an old tin can, lard pail.
One beats and beats for that which one believes.
That's what one wants to get near. Could it after all
Be merely oneself, as superior as the ear
To a crow's voice? Did the nightingale torture the ear,
Pack the heart and scratch the mind? And does the ear
Solace itself in peevish birds? Is it peace,
Is it a philosopher's honeymoon, one finds
On the dump? Is it to sit among mattresses of the dead,
Bottles, pots, shoes and grass and murmur *aptest eve*.
Is it to hear the blatter of grackles and say
Invisible priest, is it to eject, to pull
The day to pieces and cry *stanza my stone*?
Where was it one first heard of the truth? The the.³⁷⁾

人は坐って古いかん詰めのかん、ラードのバケツをたたく。
人は自分の信念のためにたたき続ける。
それは人が近づきたいものだ。もしかして結局それは、
鴉の鳴き声に耳が勝る程度に優れた
ただの自分自身ではないのか？ ナイチンゲールに
耳が苦しめられ、胸がいっぱいにされ、心が傷つけられたか？
耳は気むずかしい鳥に慰められるか。
人がごみの山で見つけるのは
平安か、哲学者の密月なのか。
それは死人のマットレスや、空びん、古なべ、
古靴、草の中に坐り「最上の宵」とつぶやくことなのか。
ムクドリモドキのさえずりを聞いて「姿なき僧侶」と言うことな
のか。
それは日を追い出し、ずたずたに引き裂き、「詩節、わが珠玉」

と叫ぶことなのか。

人はどこで初めて真理を聞いたのか。そのそのを。 (拙訳)

ここは「ごみの山の男」の最終連である。人は信念のために力むのであるが、古いかん詰めのかんをいたずらにたたいているのと同じ程度に愚かなことかも知れない。鳥の鳴き声によって、喜んだり、悲しんだりする様に、人は様々な現象の渦にまきこまれて、一喜一憂している。それは心が信念や鳥や死人のマットレスや空びんなど、あらゆることでいっぱいになっているからだ。心を飾りすぎているのだ。心を簡素に、空虚にしてはじめて安らぎが生じてくる。ごみの山の男はごみの山にいて、ごみの山を宝の山ととられることなく、しかしそこに美を発見出来る自由なる心の持ち主である。釈迦の語る「汝の善行を隠せよ」という言葉の真理を見抜く人である。茶の心をわきまえた男であった。

注

- 1) *The Letters of Wallace Stevens*, ed. Holly Stevens (New York: Knopf, 1981), p. 381.
- 2) 『世界宗教大事典』(平凡社, 1991), 1866頁。
- 3) Joan Richardson, *Wallace Stevens The Early Years 1879-1923*, (New York: William Morrow, 1986), p. 62.
- 4) マクス・ミュラー『宗教学綱要』(清水友次郎訳, 丙午出版社, 1921), 20頁。
- 5) *Letters*, p. 137.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) Richardson, *op. cit.*, p. 555.
- 8) 在学中 S. T. Coleridge と終世の交わりを結んだ。1792年 East India Company に転じて1825年まで勤続。1796年 Mary が狂気の発作中に母を殺したので、姉の保護者として終生独身で通した。彼自身も失恋の悲しみなどのために1795年末から翌年始めまで入院していた。*Tales from Shakespeare* は有名な作品の一つである。『英米文学辞典』齊藤勇・西川正身・平井正徳編(研究社, 1985), 718頁。

- 9) 岡倉天心『岡倉天心全集』第一巻 (平凡社, 1980), 272頁。
- 10) *Loc. cit.*
- 11) Wallace Stevens, *The Collected poems of Wallace Stevens*, (New York: VINTAGE BOOKS, 1982), pp. 66-7. 以下 CP と略す。
- 12) 岡倉天心, *op. cit.*, 266頁。
- 13) Wallace Stevens, *Opus Posthumous* (New York: VINTAGE BOOKS, 1982), p. 167. 以下 OP と略す。
- 14) 岡倉天心, *op. cit.*, 278-79頁。
- 15) OP 169.
- 16) *Ibid.*, 170.
- 17) CP 65.
- 18) 有元清城「詩の「意味」——Wallace Stevens と現代日本の俳句作家たち——」『市邨学園大学開学記念論集』1980. 参照。
- 19) Hisayoshi Watanabe, “Wallace Stevens: Poet of Our Climate” *ALBION* 21 (京都大学, October 1975), 12.
- 20) CP 208.
- 21) *Ibid.*, 9.
- 22) *Ibid.*, 112-13.
- 23) 新倉俊一『ウォレス・スティーヴンズ』(山口書店, 1982), 3頁。
- 24) 有元清城「〈大人の隠喩〉をめぐって——Wallace Stevens “Metaphor of a Magnifico”——」『外国語研究』11 (愛知教育大学, 1973), 3。
- 25) 夏目漱石『漱石全集』第二巻 (岩波書店, 1966), 395-96頁。
- 26) 有元清城「Stevens: The Snow Man をめぐって」『外国語研究』8 (愛知教育大学, 1970), 83。
- 27) 有元清城「Wallace Stevens の世界」『研究報告』10 (愛知学芸大学, 1961), 11。
- 28) 岡倉天心, *op. cit.*, 282頁。
- 29) *Ibid.*, 289頁。
- 30) OP 157.
- 31) CP 201.
- 32) 岡倉天心, *op. cit.*, 313頁。
- 33) CP 202.
- 34) *Loc. cit.*
- 35) *Loc. cit.*
- 36) 岡倉天心, *op. cit.*, 318-19頁。
- 37) CP 202-03.